

頸部リンパ節穿刺にて悪性リンパ腫との鑑別に苦慮した上皮性腫瘍の一例

◎関 香織¹⁾、小泉 峻¹⁾、谷高 由利子¹⁾、福田 淳¹⁾
社会福祉法人聖隷福祉事業団 総合病院 聖隷三方原病院¹⁾

<はじめに>

頸部リンパ節穿刺細胞診は、主としてリンパ節腫大の際に行われる。そのため細胞所見はリンパ節自体の炎症や感染等による反応性所見から、悪性リンパ腫や転移性腫瘍等による悪性疾患の所見まで様々である。今回我々は、頸部リンパ節穿刺細胞診において悪性リンパ腫と上皮性腫瘍の鑑別に苦慮した症例を経験したので報告する。

<症例>

50代男性、左頸部リンパ節腫大を自覚し耳鼻科を受診、穿刺細胞診が施行され、悪性リンパ腫が示唆された。左頸部リンパ節摘出検体の組織診断では上皮性腫瘍、免疫染色にて尿路系腫瘍の可能性を指摘された。その後施行された造影CT、腎臓生検組織診で、尿路上皮癌が検出され、左頸部リンパ節腫大は左腎盂尿路上皮癌の転移であるとの診断に至った。

<細胞所見>

提出された左頸部リンパ節穿刺検体では、背景は壊死様で核異型が強く、中～大型の裸核様の悪性細胞が大多数を

占めていた。また悪性細胞の出現パターンは、一部集塊様の部分もみられたが、多くが孤在性に認められたことから第一に悪性リンパ腫を考えた。

<病理所見>

細胞診断後に実施された左頸部リンパ節摘出検体には、組織学的に充実状に増殖する腫瘍がみられた。腫瘍細胞は、免疫組織化学的に、扁平上皮癌と尿路上皮癌が鑑別にあがった。一方腎臓生検検体では、腫瘍は **nested and trabecular pattern** を示し、免疫組織化学的に尿路上皮癌と診断された。

<結語>

頸部リンパ節穿刺細胞診検体の細胞所見は反応性、悪性、上皮性、非上皮性腫瘍など多様であり、丁寧に細胞所見を読み解く必要がある。細胞の結合性の有無、細胞質の有無と共に、今回標本中の背景に多くみられた壊死物質が悪性リンパ腫でみられることのある無構造物質であるのか、または一般的に悪性腫瘍に随伴しやすい腫瘍性壊死であるかを鑑別することも、診断の一助となりうることが実証された。
聖隷三方原病院 053-436-1251(3550)